

”Decency”から考えたことー米国大統領選挙後の演説を聴いてー

2020年11月10日
大阪大学接合科学研究所
勝又 美穂子

世界を賑わせた米国大統領選挙も実質決着がつき、大統領候補バイデン氏と副大統領候補ハリス氏のスピーチを興味深く聞いた。心に残る文言の多いスピーチだったと感じるが、その中で少し考えてみたいと気に留まった言葉が“Decency”である。

演説の原文から引用するとそれぞれ、“Americans have called upon us to marshal the forces of *decency*, the forces of fairness…”, “the battle to restore *decency*…”（共に Joe Biden 氏大統領選挙勝利演説原文より）, “You chose hope, unity, *decency*, science, and, yes, truth…”（Kamala Harris 氏, Joe Biden 氏勝利演説の前段演説原文より）, と表現されており 2 人のスピーチでは合計 3 回この言葉が語られた。

“Decency”の意味をケンブリッジ英英辞典で調べると“behavior that is good, moral, and acceptable in society”と記されている。“Decency”の形容詞である“Decent”は同辞典で“socially acceptable”,つまり「社会的に許容できる」という意味が記されている。

“Decency”や“Decent”は筆者が米国留学時代、授業や友人との会話において度々出て来た頻出単語であったが、一方で、その適切なニュワンスの理解に苦しんだ表現であった。“Decency”の使われ方は様々で、特にその形容詞としての“Decent”は、一例だけをとっても“it is a decent work”, “he is a decent person”, “please wear decent cloth”,あるいはただ“decent!”とだけ使われることもあり、多岐の意味合いを持って使われていた。

では、バイデン氏とハリス氏の演説で表現された“Decency”はどのように日本語に訳されているのだろうか。全文を掲載した日本の新聞社の内 2 社（日本経済新聞及び毎日新聞）のそれぞれ二人の演説翻訳文を見てみると、“Decency”の訳は記者（翻訳者）の間で異なっており、同じ新聞社内でもバイデン氏とハリス氏の演説間で翻訳が異なり、新聞社間で比較すると両氏同じ個所でも別の翻訳が当てられている。例えばバイデン氏が述べた“the battle to restore *decency*…”について見てみると、日本経済新聞では「…**品位**を回復し」と訳され、毎日新聞では「…**良識**を取り戻し」と訳されている。結果、両新聞社では“Decency”に対する翻訳として「良識」「礼節」「品位」と異なる 3 種類が見られた。この 3 つの熟語は類義語ではなく、日本語でそれぞれの熟語が使われた場合、受け手へ伝わる情報は言葉が持つ意味だけでなく、強弱、連想される背景等も異なる。“Decency”の翻訳にそれぞれ 3 つの異なる翻訳があてはめられた、ということはそのこと自体が意味する通り、“Decency”とは日本語でズバリ表現することが難しい、つまり日本語を母国語とする者には解釈の難しい単語なのだろうと考えられる。

今回の両氏演説は米国国民全員に向けたものであった。バイデン氏の演説でも、自身を支

持する人、しない人に関係なく米国民全員に尽くすのが大統領である、という意味合いが表現され、米国民全員へ伝える意思が感じられた。一方、演説は過去 4 年間のトランプ政権のもたらした状況が「負」であることを前提に語られており、その文脈で、例えば”the battle to restore *decency*…”が語られた時、この”Decency”に「良識」「品位」「礼節」等の日本語訳を当てはめると、「…良識（品位、礼節）を取り戻すための闘い」となり、裏返せばこれまで、そして現状は「良識がない」「品位がない」「礼節がない」状況だと言っていることになる。演説が米国民全員に語られるものであるとする中で、この日本語訳ではトランプ政権や大統領を支持してきた国民にとっては厳しいメッセージとして響いてしまうだろう。しかし、米国民の「結束」を呼びかけるバイデン大統領候補にとり「…良識（品位、礼節）を取り戻すための闘い」、が対トランプ政権、対トランプ支持者に向けられた言葉ではないだろうことは容易に理解できる。

米国は多様である。“Decency”を日本語訳的に「良識」「品位」「礼節」と理解したとしても、米国のように異なる価値観、背景、信仰等が混在する中ではそれぞれが持つ意味にも大きく幅があるだろうし、解釈に幅があることが自然な状況として存在するからこそ、米国にはそれを当たり前として捉える土壌が国民、そして社会に醸成されているのだろう。そう考えた時、筆者がズバリの解釈に悩まされ続けているこの“Decency”、“Decent”という単語は、意味が曖昧（広範）であることに意義があり、受け取る人の捉え方によりその意味を微妙に変化させられる柔軟な言葉である必要があるのだろう、という理解に至った。

その上で、今回の演説における“Decency”の解釈に改めて挑戦してみると、それは決して「政治」や「社会」だけを視野に入れた解釈ではなく、個々の米国民が今それぞれに思う“Decency”に対するものであり、コロナ禍で影響を受けた仕事（職業）かもしれないし、家族、夢、健康、教育、社会、政治、友人、環境、に対してかもしれない。つまり各個人が置かれる無数の状況に対応したそれぞれが「社会的に許容される」状態を取り戻すものとして柔軟に解釈されるべきなのだろうという考えに至った。ここにおける「社会に許容される」とはどんな状態かについても、個々人の持つ考えは多様で、決して同一ではないのだろう。そう考えると「結束」を呼び掛ける 2 名の演説で”Decency”が重要なワードとして「全米国民」に投げかけられた理由もじっくりと来たように感じている。

“Decency”の解釈に悩まされ続ける筆者であるが、自分自身としての“Decency”を語れるようになるにはまだ時間がかかりそうである。大学機関に身を置くものとして、教育、研究、学問において“Decency”をどう位置づけていくか、また個人として自身の人生における“Decency”をどう構築していくか、更には日本人として、日本が置かれる状況、国際的な立ち位置で“Decency”をどう捉えていくべきか、多様で柔軟なこの言葉を自身が置かれる状況の中で適切に受容し解釈、判断して行く土壌が自分の中に十分に醸成されているとは言えず、模索の旅路はまだまだ続く。

以上